

Adam Bede における Rustic Speech の一面

高橋 弥生

George Eliot は Hardy とならんで regionalism の作家として英文学に対する貢献は大きい、特に小説における方言の開拓者としても特筆に値する作家である。方言は古くから文学の中にとり入れられてきたが、その機能は一般に地方色や身分をあらわすことにあった。一方、George Eliot や Hardy にいたって、方言は彼らの文学の本質にかかわる重要な意義を持つようになる。彼らにあって方言は小説の勃興と共に英文学に入りこんだ realism と、19世紀に入り英小説界に入りこんだ regionalism との産物としてとらえるべきである。

まず18世紀前半、小説の勃興と共に、いわゆる realism なる要素が文学に入りこみ、散文文学のとりあげる対象は、王侯貴族や聖書にまつわる物語より個人や庶民へと変化した。この変化は当然文体上にも影響を及ぼし、romance を飾っていた高度に修辭的な文体より novel 特有の平易な口語体へと変化する。この文体上の realism は小説界にとどまるものではなく、Wordsworth が *Lyrical Ballad* (1798) にて詩語を廃止し平易な日常語を用いるよう努めたのも同様の動機によるものであろう。George Eliot や Hardy がはばかることなく方言を文学作品の中にとり入れることが出来たのも、このような流れをくんでのことである。更に、この方言使用に拍車をかけたのは regionalism の流行である。Rousseau, Wordsworth, Crabbe, Cowper 等の影響のもとに19世紀前半、地方色豊かな文学がもてはやされたが、George Eliot や Hardy は彼ら自身の地理的環境の特質を存分に発揮し、独自の世界を開拓したのである。

この小論にては George Eliot 初期の一連の田園小説より *Adam Bede* をえらび、そこに登場する rustic のことばの一面を考察してみたい。

この作品の rustic speech の母体となるのは Staffordshire の方言である。標準語と方言という言語の相違は当然のことながら、その文体にも影響を及ぼし、この作品ではこの二種類の会話体が巧みに交差し、色彩豊かな模様を織りなす。標準語を話す集団を構成するのは牧師の Irwine 家と地主の Donnithorne 家である。方言を話す集団を構成するのは大工の Bede 家と農夫の Poyser 家である。方言を話す集団には主人公 Adam Bede や脇役中の中心人物である Mrs Poyser が属しているため、この小説における方言は質量共に George Eliot の作品における方言研究に対する貢献がもっとも大である。

標準語による文体を基準とし、方言による文体をそれからの 'deviation' として考えるならば、抽象的、客観的、そして時には平担でさえある標準語の文体に対し、方言の文体は主観的、迂回的、かつ表現性にとみ感情的色彩が非常に濃厚である。このような文体効果をあげる文法的、修辭的手法は種々あるが、この作品において特に目立つ手法は、実例(以下 'illustration' と記す)の使用である。具体的には直喩、as-if clause、諺ふうの表現 (proverbial saying) 及び 'no more~than', 'might as well' 等比較の文形にもとづく表現であり、これらの表現形式に共通する心理作用は、ふたつの物の間に類似 (analogy)

を見つけることにある。一般に直喩や *as-if* clause は rustic speech によくあらわれ、Hardy 小説はそのよい例であるが George Eliot は更に徹底的にこの種の illustration にもとづく表現を開拓した観がある。

Mrs. poyser's readiness at illustration is too much a peculiarity of the author's own for us to suppose it borrowed from another. All his characters are rich in this gift...²

このように具体的な illustration を用いる根本的動機は多少ともあいまいな意味内容を具体的なイメージでもって簡潔、明快に相手に伝達することにある。ただし、このイメージの使用も単に実用的理由にのみもとづくものではなく、一般に rustic はイメージの使用を非常に好む傾向にある。人間の思考方法はことばではなく、まづ絵でもって始められたことを考慮すればこの image-thinking は不可抗力な人間の衝動ともいえよう。とにかく、抽象的、普遍的表現よりは具体的な事物にもとづくイメージの方がはるかに面白味を多くあたえることはたしかである。Rustic の用いるイメージは詩人が用いるイメージが持つ精神的な啓発力に欠けてはいるものの、やはり鋭い観察と概念的思考との産物でありふたつの物の間に類似性を見つけるという単純な心理作用でさえも宇宙に存在する普遍的法則や人生に存在する普遍的真理探究の産物である。

さてここで、illustration という文体手法の性質をその表現形式にそって考察してみる。勿論この illustration にも比喩的 (figurative) なものと字義通り (literal) なものがあるが、文体論で問題となるのは比喩的なものである。Illustration の基本形式はもっとも簡潔な表現形式をもつ直喩を考えてみても明らかなごとく、ふたつの物 (以下 X と Y という記号で表わす) の間にある共通性 (以下 A という記号で表わす) を認めることにより成り立つ表現である。つまり前述の如く X と Y との間に一種の類似を見つける心理作用がこの表現形式の基盤にある。ただしここで注意すべきは比喩的な illustration において X と Y とは異なる次元に属する物であり、かかる物の間に類似を見つけるのであるから比喩的なのである。この点が字義通りの illustration との相違点である。字義通りの illustration において X と Y は文字通り比較が行なわれているのであって、比喩的色彩は皆無である。

更に、比喩的な illustratian の形式において X と Y とは対等の価値を有しているのではなく、あくまでも一方 (X) が主体 (tenor) であり、他方 (Y) は X の性質 (A) を明確に伝達するための単なる媒介物 (vehicle) である。

又、この illustration の使用はその意味内容により二種類に分類出来る。強意 (Intensification) と叙述 (Description) とである。強意の場合は単に X と Y との間に類似の存在する事そのものの指摘が目的ではなく、更に一步進んで X の性質の度合を強めるのが目的であり、その形式は 'X is as A as Y' (強意的直喩) 及びこの形式に還元しうる形式をとる。叙述の場合は単なる様態の叙述が目的であるから X と Y との間にかなる種類の類似がいかなる程度に存在するかということの指摘が目的ではなく、類似が存在するという事実そのものの指摘が目的である。従って、その表現形式にはしばしば A が表現されず、X と Y とが直接結合され、A は X と Y との関係により暗示されるのみである。'X is like Y' (叙述的直喩) 及びこれに還元しうる形式がそれである。

しかし用例によっては単なる叙述か又は強意であるかを判断するに困難なものがある。これはたとえば強意的直喩が元来は単なる叙述であったものが使い古されて慣用句となり

強意的表現へと変化した事を考慮すれば当然の事であり、illustration の用例の分類に関しては話者の心理状態や文脈を十分に考慮する必要がある。

I 強意的な illustration

(1) 強意的直喩

強意的な illustration の最も代表的なものが強意的直喩であり、これは昔から英国の俗語や方言に使用されて来た。まず直喩的表現において興味あるのはいかなる物を比喩の対象、つまり Y として選択するかということである。Rustic のごとく社会的、地理的生活環境を共にする者達の間にあっては Y の選択性にある程度の共通性があり、そこから rustic の興味の対象、想像力の範囲を推測しうるのである。ここで便宜上 Adam Bede の rustic speech にあらわれる直喩（強意的直喩と後に述べる叙述的直喩）を一括して、Y を分類してみると、動、植物に関する物が全体の $\frac{1}{3}$ を占め、次いで人間に関するもの、そして天然現象に関するものにつづく。都会生活や近代社会を連想させるものは皆無といってよく、田園地方という地域性を如実に物語っている。今、強意的直喩から少々例をあげておく。

as uneasy as a new sheared sheep, groon as loud as your cow did, as still as a bird, as black as sloes, as yellow as a crow-flower

更に強意的直喩には伝統的な直喩というものが存在するが、これは前述の如く強意的直喩とは叙述的直喩が慣用化したものだからである。Rustic が人口に膾炙した既製の直喩を愛用するのは彼らが目新しさよりも実用性と親密性を重じるためであろうが、陳腐な直喩を素直に使用するところが彼らのもつ素朴な魅力である。

ある程度以上の教育を受けた者が直喩をあまり用いぬ理由はまず第一に陳腐な比喩を用いるのも教養の程がわかり、さりとて新奇な比喩を日常会話にとり入れるのも不自然かつ気どった印象をあたえるということと、第二に一般に標準語による話しことばは事務的で、不必要な修辭をさける傾向にあるため、直喩のごとき感情的色彩の濃い誇張的表現をさけるものと思われる。

(2) No more~than

Adam Bede の特色のひとつは強意的直喩の外に比較の形式 'no more~than' による強意的表現を活用したことである。いまふたつ例をあげてこの形式が強意的に用いられた時の説明を試みる。

you knew no more o' what belongs to work when you come here than the mawkin i' the field.³

この文の内容は否定の意味を肯定的表現に還元すれば直喩形式 (X is as A as Y) で表現出来る。

you are as ignorant o' what belongs to work when you come here as the mawkin i' the field.

次の文も同様である。

He bears me no more malice nor a lamb.⁴

He is as meek as a lamb to me.

この 'no more~than' の形式においては X の性質 (A) は明記され、しかも上記のような文においては Y は A の度合をつよめるために用いられているのであるから強意的直喩と同様の機能を有していることになる。もちろん 'X is as A as Y' の形式も単なる叙述的直喩

に終ることがあるように 'no more ~ than' の形式も単なる叙述におわる例もある。しかしここでは強意的な用例のみ少しあげておく。

as is o' no more use nor the gillyflower on the wall.⁵

he could no more ha' done wi'out me nor one side o' the scissars can do wi'out th' other.⁶

wi' no more head-piece nor a sparrow.⁷

take no more care what you're thinking of than if your heads were gutters for any rubbish to swill through that happaned to be in the way.⁸

there is no more moving you than the rooted tree.⁹

II 叙述的な illustration

この表現の特質は前述の如く、類似が存在するという事実そのものの指摘があるだけであり、いかなる点にて類似が存在するかという説明はない。従ってこの表現形式の面白味はいかに機知にとんだ関係を X と Y との間に成立させるかにある。文体的効果をあげるためには X と Y とはある程度の距離をもつ必要があるが、同時に又聞き手に X と Y との類似性の推測を不可能にする程、あるいは X と Y との結合を不自然にするほど距離があきすぎてもいけないのであり、この辺が話し手の機知の見せ場である。ただし話者はしばしば X と Y との関係を明確にする補足的内容の文 (A に相当する内容の文) を illustration の前か後に配置しているので、実際には X と Y との関係が不明なことはない。

(1) 叙述的直喩

叙述的な illustration の最も一般的なものは叙述的直喩であり、'X is like Y' の形式をとることが多い。Adam Bede においてはこの種の直喩が強意的直喩の約 2 倍の 55 個あらわれるが、それはこの形式が文体手法として簡単なものであり、誰でも手軽に利用しうるところにある。従って平凡な内容のものが多く文体的効果もあまり目立たぬのでここでは用例をあげるのを省略する。

(2) As-if clause

As-if clause は叙述的直喩よりもより説明的、分析的比喩を必要とする時に使用される傾向にある。何故ならこの表現形式は直喩ほど固定していないため、より複雑で独創的な内容を比喩の対象にもち出すことが出来るためである。ただし前述の如くこの形式には 'A' は記述されていないため、補足的な説明の文が後に配置されることが多く、全体として冗長な観を呈することが多い。直喩のごとく単刀直入で強烈なイメージをあたえることは不可能である。よほど機知にとんだものであれば rustic 特有の物の見方とユーモラスな表現態度を反映し、紋切型の直喩とはまたことなつた面白味を出すので、そのような例を少しあげておく。

For them Methodisses make folks believe as if they take a mug o' drink extry, an' make theirselves a bit comfortable....¹⁰

It's no use looking on life as if it was Treddles'on fair, where folks only go to see shows and get fairings.¹¹

...it's like as if you'd been cooking a feast and had got the smell of it for your pains.¹²

(3) Might as well

叙述的な illustration の中で最も面白味を發揮するのは 'might as well' の文形と次にのべる諺ふうの表現とである。直喩や *as-if* clause はあまり機知に恵まれぬ者でも簡単に使いこなせる形式であり、従って平凡な内容のものが多くなりがちである。一方、'might as well' や諺ふうの表現はある程度の知性と雄弁を有している者でなければ即興的な会話体の中にこれらの形式を織り込むことは困難であり、少数の人物の会話体の中に集中的にあらわれる傾向にある。Adam Bede においては Mrs Poyser がこれらの形式をもっとも頻繁に使用する人物である。この Mrs Poyser は Adam Bede きての雄弁家であり、rustic speech の諸相を提供する者としてその貢献は大であるから、ごく簡単に彼女の性格を紹介しておく必要がある。

農夫である Mr Poyser の妻である彼女は、少々のんきな夫とは対照的に機敏な知性と弾力性ある機知に恵まれ、彼女のことばのもつ鋭さは村中の評判である。今ここで彼女の文体を特色づけることばを作中人物のコメントからひろってみる。'his wife's words were, as usual, rather incisive than soothing' (Mr Poyser), 'she says such sharp things too' (Mrs Irwine), 'If her tongue's keen, her heart's tender' (Adam) この Adam のことばでもわかるように彼女の深い愛情も又彼女の魅力のひとつである。

彼女の機知と雄弁は illustration のもつ文体効果を十分に發揮することが出来、充実した内容の面白い表現が出来上る。'Might as well' による illustration の用例はこの作品の中に 8 個あらわれるがそのうち 6 個までが Mrs Poyser のものであり、次にあげる用例はすべて彼女のものである。ごく卑近なものを Y にえらびながらも、それを X と結合させることにより非常に精彩に豊んだ文体をつくるのが彼女の才能である。

...for where's the use of a woman having brains of her own if she's tackled to a geck as everybody's a-laughing at? *She might as well dress herself fine to sit back'ards on a donkey.*¹³

*you might as well beckon to the flying swallow, as ask Dinah to come an' live here comfortable, like other folks.*¹⁴

It's allays the way wi' them meekfaced people; *you may's well pelt a bag o' feathers as talk to 'em.*¹⁵

(4) 諺ふうの表現

この作品においては諺ふうの表現もよくあらわれる。この表現において X は前後の文脈で示され、諺ふうの表現そのものは Y のみをあらわしている。この表現は性質上教訓的であるが、Adam Bede においては辛辣な内容のものが多くやはり機知の見せ場であり Mrs Poyser が活躍する。この作品には 14 個の用例があらわれ、その内 7 個が彼女の用いるものである。

ここで X に相当する文脈の説明を加えつつ用例を少しあげておく。

主人公 Adam は仕事もせず酒にひたる父への腹いせに家出をしようと思うが、後に残る母や弟のことを考え次のように述べて自分を諫める。

*A pig may poke his nose into the trough and think o' nothing outside it; but if you've got a man's heart and soul in you, you can't be easy a-making your own bed an' leaving the rest to lie on the stones.*¹⁶

Mrs Poyser は姪の Dinah がメソディストであることに好感がもてず、メソディスト風の物の考え方の不可解さを皮肉って次のようにいう。

But I suppose you must be a Methodist to know what a Methodist 'ull do. *It's ill guessing what the bats are flying after.*¹⁷

狡猾な老地主 Donnithorne も又 Mrs Poyser の非難の的である。汗水たらして働くのは我々百姓であり、甘い汁を吸うのはお前さん達地主であるとのべ、地主に面と向って次のようにいう。

*But there's folks 'ud hold a sieve under the pump and expect to carry away the water.*¹⁸

Mrs Poyser の毒舌的な諺ふうの表現も それ自身 価値あることを認め、村の牧師 Mr Irwine は次のように述べる。

… her tangle is like a new-set razor. She's quite original in her talk, too; one of those untaught wits that help to stock a country with proverbs.¹⁹

以上強意的、叙述的 illustration の用例を羅列したのであるが、次に文脈との密接な関連性を考慮しつつ illustration の機能を考察する必要がある。前述のごとく直喩や *as-if* clause による illustration は George Eliot の作品に限らず rustic speech によくあらわれるが、*Adam Bede* の特色は更に 'no more~than' 'might as well' 諺ふうの表現及びこれらに相当する表現形式を活用したことにある。しかもこれらは Mrs Poyser の会話体に特に集中的にあらわれる。そこで、彼女の文体を中心に *Adam Bede* における illustration の機能をさぐってみる。

彼女のことはユーモアに豊んでいるが、やはり機知が文体効果の中心となる。しかもその機知は illustration の使用に最もよく発揮される。自己の経験や鋭い観察にもとづく比喩を即興的な会話体の中に見事に織り込み、鮮明なイメージに豊んだ寸鉄人を刺す表現を自由自在に駆使する。その雄弁さにおいては彼女の右に出る者は George Eliot の描く rustic にはいないと言えよう。

特に 'no more~than' 'might as well' 及び諺ふうの表現を使用する時の彼女の心理状態には一種の共通性がある。それは何らかの理由で彼女が不平、不満を感じている時であり、感情的興奮をこの形式に託して爆発させ、一種の 'relief' を得ているのである。彼女の不平、不満の種にもっともなりやすいのは彼女自身の姪である Dinah と夫の姪である Hetty とであり、この両者について直接的、間接的に言及する時には、illustration がよく用いられる傾向にある。'Might as well' や諺ふうの表現はそれ自身強意的表現ではないが、Mrs Poyser の場合はとりわけ事態を誇張化して表現したい時などに用いられるのであり、その使用の仕方そのものは常に感情的色彩がつよい。誇張的効果のある諺ふうの表現の例をひとつあげてみる。Dinah はしばし Poyser 家に滞在したのち再び荒涼とした北の土地に帰ると言う。Mrs Poyser は彼女に自分の家を永久に我が家にせよと説得するが効果がない。Dinah が去ったあとの淋しさを強調して Mrs Poyser は Dinah に次のように言う。

"If you didna mean to stay wi' me, you'd better never ha' come. *Them as ha' never had a cushion don't miss it.*"

"Nay, nay," said Mr Poyser, who objected to *exaggerated views*. "Thee mustna say so..."²⁰

以上の如く *Adam Bede* において、特に Mrs Poyser の会話においては illustration

の使用は様々な感情的興奮を発散さす媒体となっているが、その文体効果はどのようなものであろうか。John Dennis の次のことばは参考になろう。

No sort of imagery can ever be the language of grief. If a man complains in simile, I either laugh or sleep.²¹

Illustration を用いることは時には高度の修辞であり、感情の統制と精神的余裕が必要である。ちなみに Hardy の rustic speech を眺めてみると、強意的表現として大いに活用されるものに誓語を利用した強調構文 'I'm damned if A isn't B' の文形がある。これは衝動的、野生的そしてダイナミックな文体をつくりあげる。Adam Bede においてこの表現形式は一度あらわれるのみであり、この作品の rustic speech は全体にある程度の感情的統制がとれている。そこには Hardy 流のユーモラスで自由奔放な衝動性はない。Hardy にとって George Eliot の rustic speech は 'small-town' の人々のことばのように聞こえ 'unconvincing' であった²² という批評もこのような点を指摘するものと思われる。

Hardy は当時の上品ぶる中産階級のことばに対抗するものとして、方言に自然な人間性の発露を求め、誇張的表現、ユーモア、そして野生味を強調したのである。一方 George Eliot には Hardy に見られるような社会に対する挑戦的態度がないばかりか、彼女は Adam Bede の中心となる rustic をいづれも 'respectable people' を自任するところの農村の中間層の者とし、過度なユーモアも、野卑な表現もさけた観がある。Mrs Poyser はこの 'respectable people' を自任する rustic の典型であり、'farmer' の妻であることを誇りとし、かつその責任を十分にわきまえた女性である。又、不当なあつかいを受けた際には、相手の身分にかかわりなく自己を主張し、筋の通った議論をかわすことの出来る女性でもある。彼女は決して無知で愚鈍な百姓女ではなく威厳を持った女性であり、不平不満をもむやみにわめきたてて発散さすのではなく、機知に託して鋭く相手に訴える。主人公 Adam も雄弁さにおいては Mrs Poyser に劣るが彼女と同様のタイプの rustic である。

要するに Adam Bede において illustration は rustic speech にはつきものの強意的表現の要因として機能を果しており、そしてそこから生れる文体においては、衝動的感情も露骨で野卑にならぬようにある程度統制されている。

最後に illustration の文体機能として重要なイメージに関する考察をしておく。

直喩を論じる際にも言及したごとく、rustic の用いるイメージは田園生活を連想させるものが圧倒的に多いが、更にこの作品においては domestic なものが目立つ。たとえば食物に関するイメージがあらわれるが、これはいかにも女性らしい観察の産物である。用例を少しあげてみる。

as white as a flick o' new bacon/like the pork/like having roast meat at three fires/like a loaf in a tin last year/no bigger nor a double cheese/No more nor the cake 'ull come wi'out the leaven/When your broth's ready-made for you, you mun swallow the thickenin', or else let the broth alone.

又、Adam の母 Lisbeth は亡夫の思い出にふけりつつ次のようなことばを吐くが、この 'ハサミ' のイメージは Donne の 'コンパス' のイメージの domestic version ともいえよう。

...he could no more ha' done wi'out me nor one side o' the scissars can

do wi'out th' other.²³

Adam Bede にあらわれる rustic image を総合すればそこから浮び上る絵は文字通り Dutch School 風のものであり、日常生活を詳細に描写した一巾の田園風景画である。

この作品の日常生活との密接さは、作者が女性であるためであるが、何よりも重要なことは rustic speech において女性が重要な地位を賦与されている事である。言いかえれば脇役中に Mrs Poyser や Lisbeth のごとく重要な女性が存在することである。肝心の女主人公である Hetty がほとんどしやべらぬせいか脇役の女性の会話体に対する作者の注意が特に目立つ。このような現象は Hardy 小説には見られぬものであり、彼にあって rustic speech は男性的色彩が非常に強い。

George Eliot は性別ばかりか個人色をもことばの中に織り込んだことは当然である。語彙ばかりかイメージにおいても話者の職業、身分、性格が反映されている。Mrs Poyser の用いるイメージは鋭い観察力、豊かな批判力を備えた家庭の主婦、農家の主婦のものに外ならない。Adam の用いるイメージは大工のそして職人のものに外ならない。

主役ばかりか、とかく類型的になりやすい脇役の会話体にまでこれだけのニュアンスをつけたことは特筆に値する。George Eliot のことばに対する感覚は *The Mill on the Floss* における Dodson 姉妹の個性あふれる躍動的な会話体、そして *Middlemarch* における神経のゆきとどいた知的な会話体においても精彩を放ちつづけるのである。

ともあれ *Adam Bede* においては物語の舞台となる Hayslope という村の精神風土を代弁するのが rustic であり、作者はこの rustic なるものを抽象的な集団とわせずに Bede 家、Poyser 家に具象化した。かくして彼らのことばは speech-as-function であると同時に speech-as-an-end でもあり、非常にリアルなそれ自身の存在理由をもって読者に迫るのである。

註

使用テキスト：*The Works of George Eliot, Illustrated Copyright Edition, (London)*

1. Henry Auster, *Local Habitations, Regionalism in the Early Novels of George Eliot*, (Harvard University Press, 1970), P.22.
2. David Carroll (ed.), *George Eliot, the Critical Heritage*, (London, 1971), P.100.
3. *Adam Bede*, Vol.I, P.108.
4. *Ibid.*, Vol. I, P. 28.
5. *Ibid.*, Vol. I, P. 63.
6. *Ibid.*, Vol. I, P.159.
7. *Ibid.*, Vol. I, P.285.
8. *Ibid.*, Vol. I, P.354.
9. *Ibid.*, Vol. II, P.282.
10. *Ibid.*, Vol. I, P. 83.
11. *Ibid.*, Vol. I, P.250.
12. *Ibid.*, Vol. I, P.119.
13. *Ibid.*, Vol. I, P.144.
14. *Ibid.*, Vol. I, P.287.
15. *Ibid.*, Vol. II, P.290,
16. *Ibid.*, Vol. I, P. 69.
17. *Ibid.*, Vol. II, P.289.

Adam Bede における Rustic Speech の一面

18. *Ibid.*, Vol. II, P. 87.
19. *Ibid.*, Vol. II, P. 93.
20. *Ibid.*, Vol. II, P.290.
21. Hooker(ed.), *The Passion of Byblis, Critical Works*,(Baltimore, 1939—43), I, 2. Preface.
22. Walter Allen, *George Eliot*, (London, 1965), P.182.
23. *Adam Bede*, Vol. I, P.159.

参 考 書 目

T.H.Svartengren著, 佐々木達訳「強意的直喩の研究」(研究社, 英語学ライブラリー27, 昭和33年)
毛利可信「意味の論理部分と心理部分」(『英語文学世界』英潮社, 昭和46年11月号)

J.Margolis, (斉藤美洲訳註)「直喩・隠喩・類比の論理についての覚書」(『英文法研究』, 研究社,
昭和33年3月号, 4月号)

※ 本文中のイタリック体は筆者による。